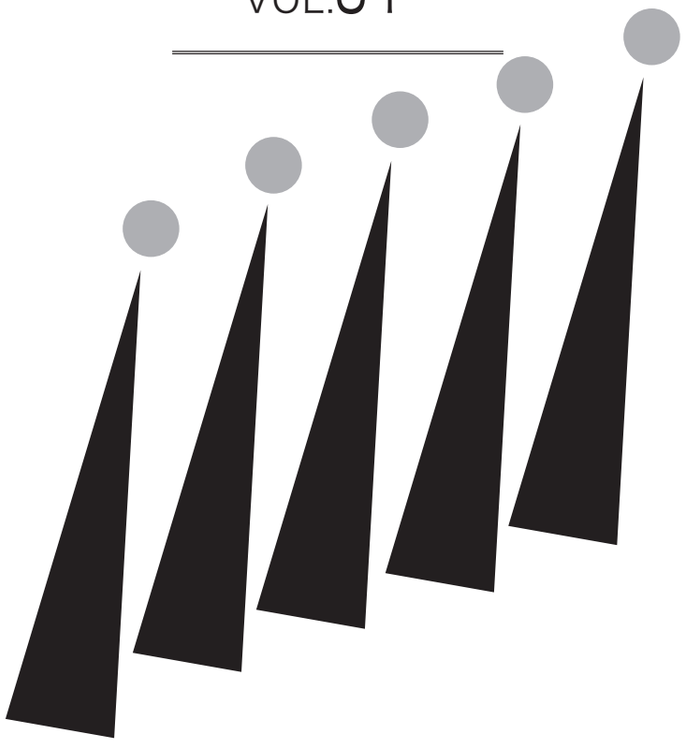
月　刊

Mélange

VOL.84



2013.08.17

第16回ロルカ詩祭 朗読詩特集

月刊「Mélange」VOL.84　2013／08／17

月刊「Mélange」編集部

「月刊めらんじゅ」84号目次

詩・川柳

84号巻頭作品　思わざる恋のガセーラ……ガルシア・ロルカ／鼓直訳　3
鎮魂／哺乳類の死生観……岩脇リーベル豊美　4
門／インタビュー……中堂けいこ　6
偶然の夏……安西佐有理　8
川柳連作18句……情野千里　10
あけやらぬ　みずのゆめ2……福田知子　11
銅鑼は鳴らない／恩寵島で哭く……大橋愛由等　12
かんなぎかむろぎかむろみ……千田草介　15
ジパンググリーンの痙攣色の――清水昶追悼……今野和代　16
Billy Bang……Tobi　17
夏の時間／うみうし……禿慶子　18

エッセイ

〈神戸詞（うた）あしび〉73「詩祭の日に永遠の詩業を始めた詩人の作品世界」……大橋愛由等　16

編集部だより★05／題16回目のロルカ詩祭は、8月17日（土）に神戸市三宮のスペイン料理カルメンで行われました。参加者は、鼓直、にしもとめぐみ、今野和代、アグスティン、富哲世、安西佐有理、高谷和幸、岩脇リーベル豊美、寺岡良信（代読）、大橋愛由等、Tobi、情野千里、千田草介、中堂けいこ、福田知子、大西隆志。ゲストに禿慶子。伴走者はバイオリン奏者の外薗美穂といったメンバーです。今回の「月刊めらんじゅ」に収録した詩篇は、詩祭のためにつくられた『8月19日詩集　第16巻』に掲載された詩篇のなかからセレクトしてものです。また、詩祭が行われた日、たつの市在住の詩人・金田弘氏がお亡くなりになりました。西脇順三郎に私淑し、一時代を画した詩人です。わたしは生前いちども会ったことはないのですが、最後の詩集を読み、今回の「神戸詞あしび」にその作品世界を記述してみました。（大橋記）

84号巻頭作品

◆思わざる恋のガセーラ

ガルシア・ロルカ
鼓直訳

お前の下腹の暗いマグノリアの
香りに気付いている者はいなかった。
恋のハチスズメを歯でくわえて
お前が苛んでいることを知る者はいなかった。

お前の額の月が出ている広場で
千頭のペルシアの小馬が眠っている
その間も、ぼくは雪の仇敵である、
お前の腰を四夜も締め付けていた。

石膏とジャスミンに囲まれ、お前の視線は
種子を付けながら生気のない小枝だった。
ぼくはお前に捧げるために、胸のあたりに、
〈いつも〉という象牙の文字を捜した。

〈いつも〉〈いつも〉　ぼくの苦悩の庭、
永遠にすり抜けていくお前の体、
ぼくの口のなかのお前の静脈の血、
ぼくの死に捧げられる光も消えたお前の唇

◆鎮魂

岩脇リーペル豊美

魂は荒ぶれてなどいない
まるで荒れ野の楽園を思うかのように
死後の世界を書き表すだけである
魂は迷ってなどいない
まるで殲滅の戦場を見てきたかのように
先世の記憶をたどるだけである

祝祭前夜の忌み篭り
迷うのはきえ残るもの
荒ぶるのは死に遅れたもの

途切れた命脈に銃殺される身を思い
狂ったように禊する

不浄の宿る穴という穴を洗い
体液で煮沸する秘儀を行う

神殿もなく拝殿もなく
霊魂を迎える燭台のみ
屹立する焔を媒介にして
死者と生者を時間軸が結ぶ

憑り代が示す関係性は疼痛である
誰しも折々隠喩を弄ぶが
地底では記号体系を確認するだけである

陸上に抵抗者として讃える石碑が建てられると
苦しめる側に住むものが
侵略された者たちに比べ
優れていると明かされないことに腹を立てる民よ

洗い流せば清らかになる
破壊すれば新たに始まる
来し方の否定からのみ再生を悦ぶ民よ

せめて礼砲を撃ち鳴らせ

◆哺乳類の死生観

岩脇リーペル豊美

あなたはどんな気持で私の乳輪を哺めたのだろう
もとより
あなたはいったい何者でどの海から来たのだろう

他者を最も海容するはずのの生殖期は終わった
無痛核の奔流が意識の地平を洗っている

桟道を昇りつめた時
私たちの心拍数は計器の針を振り切って高まり
地の果てに到達したことが読み取れた
これが死の一端だと思う繋ぎ目で
あなたは私と同質の肉を受け転生する

死を克服するためには死者の力を借りて
私たちはいずれ小舟となり
不可視の孤島が浮かぶ乳色の水面を
肉叢を掻き分けるように進むのだろう
柔和な潮騒が反響していても

◆門

中堂けいこ

ジャン・デールが立っている
手の鍵を見ないように
その前を横切る
椅子を押す
横切る
傘の柄をつついて
横切る
カードを差し込む
横切る
白い羽根を生やして自動扉を踏む
また横切る
百年戦争が横切る
ひゃくさいひゃくさいと二百歳を数えて
もっと数えて
重い椅子も軽くなり
傘の柄は宙を飛び

タパタパと羽搏いてもみよう
出ていく人たちはひとしなみ似た顔つきをして
ブロンズ像を横切る
暗い眼は暗すぎて英雄になれなくとも
眼の前を横切る人たちに鍵を示す
そうすればカレー市民のさざめきが上がり
エドワード王が横切るという次第だ
城門を開け放つ
sacrifice! sacrifice!
その鍵を渡せ！

注…ある病院の玄関に置かれたブロンズ像をヒントに。
ロダン作「カレーの市民」記念碑は（1337～1453）の英仏百年戦争に際し、英王エドワード三世がフランス北部のカレー市を包囲、飢餓に苦しんだ市は降伏の条件に六名の市民と城門の鍵を王に差し出した。五百年後にカレー市はロダンに彼らの英雄的行為を讃えるために記念碑を注文した。ジャン・デールは六人の一人で城門の鍵を持ち、自己犠牲と苦悩を体現しているといわれる。

◆インタービュー

中堂けいこ

河原におりていくと人々がたむろして、わたしも中に入り皆と同じように川を見つめる。ひと所を一心に見つめるというふうで、手をにぎりしめ胸にかまえ、何か声を出している。それは皆で唱和するようで、わたしは音域をはずさないよう小さい声を出す。

対岸にも人々が集まって同じように水面を見つめている。見つめられる水は常に下流へと流れ動いているのだが、視点を動かさないようにするらしかった。そうするとある時いっせいにわたしたちは川上に移動している。これは視点の動体慣性らしいのだがリアルワールドではないので、だれも気にするふうでなく川上にむかって移動していく。流水の速度と同じにわたしたちは一つのかたまりになれるのだ。ひとつのかたまりは移動（錯覚）しながら新しい声（ニュースピーク）を発しつづける。何かわからなくてもうっとりと聴き惚れてしまう心地よさだ。対岸の人々もまたひとかたまりになって移動している。どこか遠くで号笛が鳴っている。長く長く鳴り響く。皆で黙祷する。わたしは見たことも見なかったことにしようとする。正しさの基準は常に流れてわかり易い新しいことばを発する人は崇められたり蔑まれたりするのだが、常に一つのかたまりになってわたしたちは流れていくようだ。

◆偶然の夏　声のためのver.20130817

安西佐有理

偶然だ
この夏の暑さは偶然だ
暑さのさなかというのに
五分で美しくなる
一〇分で儲かる
一クリックで得をすると
スパムが殺到するようになったのは
偶然だ
いいねいいね
みんないっしょに
もうかってるね
もう買ってるね
もう帰ってるね
もうお家に帰って
還元され解体され
もうなにもないのは
偶然だ
いいねいいね
赤道の向こう
子午線の裏

あらゆる大陸、あらゆる小島から
ho, ho, ho
季節にかまわず、サンタがくる、ヨンでもゴでもロクでもなしに
もうとうに捨てた、穴あきソックスの片方を、
解析し、さがしあてた贈りものですと持ってくるようになったのは
偶然だ
災厄を知らせなくなったラジオから
誰ひとり聞き取れない歌詞にまぎれて
七十六年前と同じニュースが報じられたのは
偶然だ
あまりの暑さにとろけてしまった、五十音の隙間を狙って
ことばの形したものが押し寄せたのは
偶然だ
しかしそれも、溶けだしている
偶然ではなしに

世界の猛烈な速度と格闘している、孤立した船乗りたち
この夏
その言葉、その声は、誰のものか
凪いだ海は、ほんとうに青いのか
風の道は見つかったか
水脈にはたどり着けたか
暗闇で、光源はあばけたか
この夏
上陸地の白んだ熱にぼんやりとして
皮膚が剥ける熱砂のなかに手をさしいれてみても
蟻は、脚を抱えこんで裏返ったいくつかのほか、離散して
臭気さえしなくなった、ぬるい泥のなかを探ってみても
財宝だったものは腐食していくばかりの

静かな
騒音に満ちた
夏

偶然ではない
ひとくちを惜しんで残した
アイスコーヒーの氷が溶けて少しずつ薄まり
気づけば苦みも失せた洗い水に変わらないことは
偶然ではない
待ち望んでいたはずの
あいらしい秋の旅鳥が空地の枝にとまったとき
記憶の電池が切れていることは
偶然ではない

アスファルトの照り返しの熱に、口をあけても詰まった喉
効きすぎたクーラーの真下で冷えた舌ではなく
ひんやりと湿気をふくんだ奥底を
拡張する
皮膚の、骨の奥底
イメージの大陸、小島の奥底
天地の奥底を
拡張する
その奥底の器官から響かせる
声だけが、風
声だけが、水脈
声だけが、光
声だけが、孤独な断片をつなぎ

声だけが、未知のなつかしい象徴を生み出していくと
信じるのも
偶然ではない

大事なのはこうだ。
空洞でいること。ひとりでもここにあること。海と川の交わり。
きぬぎぬの雅な歌は、いらない。おとぎ話は、化学作用をおこさない。
自由に想像せよ　私の頭、私の体におさまった、やわらかな灰色のシステム
歌え　切り落とされ新しくなった私の首
流れゆけ　私の河の水…ひろがり、速い流れを深みに隠して、海へと
おとずれる感情は、私のものならぬ暗い極限から吹くのを捕まえた、私だけの風
そして愛、私の切っ先　不機嫌な、寄れば切る刃を、振るうのだ ※

それは、偶然ではない

（※ロルカ『ニューヨークの詩人』所収「ハドソン河のクリスマス」より、自由「訳」。
他の箇所では、詩の途中の部分も織り込んでいる。「四人の水夫が世界と格闘している／すべての眼に映る角だらけの世界と／馬がなくては駆け抜けられない世界と／一人の　百人の　千人の水夫が／猛烈なスピードの世界と格闘していた／世界がその孤独を／空でかこっているとも知らずに／／孤独な空の　孤独な世界／それは　ハンマーの丘密生した草の勝利だ／活気にみちみちた蟻の巣　泥の中のお金だ」〔鼓直訳〕）

◆川柳連作18句

情野千里

讃岐・高松で青果商を営む愛染鉄太郎は、後添えのコヒレに子が生まれ先妻の遺した子が男子であったことから、初めて持つをなごの児の珍しさ可愛さに陶然となり「あぶあぶあばばれろれろばあ」とて、めをと仲もいと睦まじゅう半年余りを暮らしたものの、八重垣新地の日月楼から届いた文の言うことには「お出でなければ死ぬべし」と馴染みの遊女を香蕉（シャンジャウ）と呼ぶのも、店で商う台湾バナナねっとりむっちり濃い甘い。かくて、居続けの鉄太郎めがけ土手の上から廓の二階へ投げ上げられた我が母・テルコの、生後六か月にして知る飛翔快楽――。

鉛筆の芯舐めるなと書いて死ぬ
おそろし芭蕉の葉が揺れる
ヘリオトロープに首締め揚げられている
虞美人草と不断草にこそ相乗効果
アンパンマンは濡れると弱い肉球
虹が逃げこみましたんやわたえの

お終いの始まりが東濱恵比寿
土用餅でメる内輪のお弔い
へくそかずら地蔵盆には枯れている
誘われているのか台湾領事の脇の下
苦味礼讃　センブリの千ゴーヤの苦
孫駆ける　蟷螂の雌ぺっちゃんこ
空箱を積むとおとこがやって来る
パナマ帽翔ぶ鉄太郎はんの素っ裸
瓜畑　密偵七転八倒す
萬民快楽　枕の下の赤い月
夜這うかな瀬戸内海を路地にして
口切りにから零す

（２０１３年８月１７日　〝ロルカ詩祭〟にて）

◆あけやらぬ　みずのゆめ　2

福田知子

大きな落雷の跡に生まれた水たまり
小さな小さないくつもの水たまり　そのひとつに
ひらいた睡蓮の花びら　その縁取りを光がすり抜けるので
あけの明星がすぐそばを横切ったことが分かる
時間というフィルターのようないのちの網があって
その網目から微かに零れ落ちる淡い光の泪
そのわずかの水量を決して見逃さないだろう

幾度も幾度も雷鳴が轟き
豪雨で世界は白っぽくなって風景が見えない
メダカは水面すれすれを泳いでいる
天を向いたメダカの眼に映る世界はいつもさかさま
浮草に顔を寄せて雷鳴のそらを一瞥し　水底に向かう
水藻に透ける光を潜って　水底にかえっていく

ひらひらと半透明のヒレを幾度も華麗に上下させながら
ある日　睡蓮鉢からメダカが消えた
小指二節ほどのちいさないのちが忽然と消えた
浮草や水藻を除き　鉢底の泥をさらえてもはみつからない
天敵に気づかずにいた
まして不意の鳥たちの襲来など思いもよらず

雷鳴が轟き　見上げたそのとき　天の酷薄を思い知った
昨日　飛来していた　セキレイのこと

この小さなビオトープ
睡蓮鉢いっぱいに増えたホテイアオイを取り払ったのがいけなかったのか
メダカがよく見えるようになってよろこんでいたのに
の視力に加担する結果となったのか
いのちがほろびることは
死骸がそこに発見できることではなかった
不可視の事件だってありえたのだ

◆銅鑼は鳴らない

大橋愛由等

25時汽船――
出航は第一七突堤
振り向くことなく
船室での発語はいちど
笑みをはばかり
苦味を忘れ　酸味を閉じ込め
鼻濁音の返事はおてのもの

岸壁がざわめく
艀の男たちが黙る
荷に「ヒソヒソ」の音
左舷に浜風が集まる
出航前に掲げられた
「遭難」の二字信号旗
港内から魚群が去っていく
これも「ヒソヒソ」の音

その日
港のすべては

半旗となり
あらがう風たちは旗を避け
値付けが終わった牛たちは反芻をやめ
黒毛の羊たちの断念はつづき
鴎は聞きなれない革命家を歌い
青亀は汽船から漏れる
憂と鬱を食べに来る

波止場のガス灯の下
ひそかに
渡された苗木
元無国籍者がプランターで育てた
世界樹
「これを」と元無国籍者
「まずは」と　おどおど と
三尺ほどに育てば
蝶の奴婢となった王子
しゃがみにきて
知らず　知らずの　刻がすぎ
王子は包摂され
知らず　知らずの　刻をへて
産卵する少女たちがやってきて
オルガンの伴奏で　国家を歌いだし　産卵を終え
光合成をはじめ
ヴェルデとなり
草迷宮となり
「そうなるのが」と元無国籍者は
恩寵島なのだ　と小声

ほほほの次に
塩味饅頭を食べ
マンサニージャを
カルメンそっくりに　飲んでみせ
コロニアル様式のバルコーンから
剥いたらっきょの皮を
さんざんに放り投げると
やってきて　ついばむ貌鳥は
「ハハ、ハハ」と啼く
きっと恩寵島に
八月一二日に死んだ
母が棲んでいることを
貌鳥は知っているのだ

25時が近づいている

航海日誌は更新されているのか
「×」とだけ記すのは
ぎっちょの航海士か
海象と時刻改正は
いつも青亀に教えらてもらい
風力　風浪
いつも「calm」とだけ
運賃を払った密航者に
祖国自慢にあけくれ
チャコリを二分半で飲み干し

次の寄港地を問われるのを嫌い
「やがて」と言い
「いずれ」と言い直し
恩寵島に向けて出航してゆくのか

今日は八月一七日

まだ間に合う　ふるさとではなく
叛徒たちが闊歩する南にではなく
ヒターノたちと金床とハンマーの
カンテホンド生ふるあの街
シギリージャが悲しく響くあのテーブル
たわわなナランハがおしゃべりをし
トカゲたちも恋歌を愉しみ
逸楽の蝶がかなわぬ愛をそそのかし
小馬たちのサパデアードも小気味良いあの街にではなく
25時に出航する汽船に乗り
世界樹が植わり
訳知りの貌鳥もやさしく
詩人たちが持っている
あの恩寵島へ

ロルカよ
まだ間に合う　25時汽船に
ロルカよ

◆ 恩寵島で哭く

大橋愛由等

きのこを食べに帰るので　私はそのまま詩学の襞を舐めていると　散々に空の方程式が割れてきて　きっとそれは半旗しかあげない国（港町）から抜け出さざるをえないしるしなのだと気づき　そのためにはペケットのほころびから落ちて行く恥辱と　左肘から生まれたまだら神が　歓喜仏にならなくてはいけないのだと　玄関先の枯れた水仙が言うものだから　どこで修養すればそれは成形するのかと問いただしてみると　かの恩寵島にある鳥小屋にいけば鳥が飛び立った後の麻布を踏みつづける儀式があるというので　小旅を重ね漆黒の波止場から漕ぎ出して恩寵島にたどり着き　麻布を踏み呪詞を唱えてみるのだが　鳥が島の風をなかなか運んでこないので一向に歓喜仏にならないままに過ごしていると　青亀が私の横にやってきて　哭きと他者性が足りない　鳥の奴婢にならなくてはいけない　などと云うのである

◆ かんなぎかむろぎかむろみ

千田草介

拡大鏡のレンズに集められた
一天文単位彼方の核融合エネルギー
そのひとしずくの中
蛋白質の焼灼された匂い
見るとそこに蟻が列をなしたまま
生命活動を停止している
いや蟻なのか
そのように見える別の生き物なのか
もはや労働も生殖も絶たれて
遺伝子を継ぐものはいない
臣民をなくせば
地下濠の奥底にいます君主(すめみおや)は
岩戸で半減期の間お籠りになるが
手(た)力男(ぢからお)なる天変地異
巫女たちの捧げもつ
鏡よ鏡八咫(やた)鏡(かがみ)
のぞいてみる鏡が
顕微鏡から反射望遠鏡に変態し
ミジンコの群れは
比重〇コンマ７の土星が浮かぶ
ソーダ水の青色で

つぶつぶのアステロイドの輪っか
理科年表の祭文の文字列が
火刑に処せられて
奉書紙に包まれた鯛に
ヒエログリフの焦げ目をつけ
神饌を聖別せらる
塩化ナトリウムの山で
蒸し固められた魚の肌の金属光沢は
もののふの腰にて
迷い人の白骨が道案内する
南島の密林を斬り払う
むかしここに都があったというのは
未来にあるというのとどうちがうのか
どうせ住めはしないのだから
エルサレムは天上にありと
どこかの偽預言者が
言ったという噂が
オズマ計画の電波にのって
星間にうかぶ都市の
ジッグラトをめがけてはしる
しかし行き着いた先にあるものは
ただ鏡に映った像なのではないか
その像の中には
そっくりの別の像があり
その像の中にもまた……

◆ ジパンググリーンの痙攣色の
——清水昶追悼

今野和代

しっ
花茨青天上に人焼く煙
　ひそやかな
月白や第七官界妹となる
　ハレーション
崑崙(こんろん)にも補陀洛(ほだらく)にも君はいず
　シパンググリーンの痙攣色にかがやく
いかずちを集めて裂ける琥珀王
　初夏の　まぶしさに　一瞬　目を細めたまま
野仏に古タイヤにも大津波
　誰にも　もうなにものも　つかまらない　疾駆の静けさで
暗い目のダリアのなかで眠れ歌
　するっといなくなった

チュニジアよ、若き兵士の夢の渦
　デクノボー
ビブラートの嘆き閉じ込める落花かな
　酔いどれ天使
瑠璃色は涅槃の国の蝶の影
　なあんて　さざめかれながら
切通し浅間山荘みぞれ虹
　ほんとうは泥酔からも喧騒の巷からも冷たく醒め
弱法師無念夢想の風と行く
　身をそぐように　青ざめ　震える　音叉のように
修羅シュシュシーシュポスさようなら
　剥離され　暗転していく沈黙の言葉とむきあっていた
ナ行変格活用が好き
　一九七三年　木枯ラシ　如月　夕暮レ　桜橋交差点横　ユーゴ書店
つくねんと「革命エチュード」聴く日暮れ
　書架カラ突然　ノド首ツタウ欲望ヲネクタイデシテ
記憶軸ぎらり傾く夏嵐
　ニガイ精神ヲマッスグ胸中ニ垂ラシ
玉の緒よ幽幻極楽地獄篇
　美シイ観念ノ鬚ヲハヤシテイタ　男爵
流転の世だぜ声を残して濃緑の

◆ Billy Bang

Tobi

彼が死んだ
それはぐうぜん風のたよりで聞いた死だった
コカイン好きだった　彼の死因は、絶対にオーバードーズ
だと思ったけれど
意外にも長い闘病の末の死だった

お金が無くなると　私にこんがんし　借金し
バイオリンの演奏でリンジシュウニュウが入ると
有金全部はたいて　仲間にお酒をふるまうような
男だった
ルーズさと　ええかっこしいの彼の姿に不安を覚えたけど
私は彼が大好きだった
マンハッタンのイーストビレッジを少しはなれた低所得
の団地に彼は住んでいた
その界わいから流れる　リズミカルなラテンの
音楽や　今までかいだ事のないスパイスの
においも感じながら　彼の家を訪れていた
時折15才になる彼の息子に会ったけど
また親父が　新しいガールフレンド　連れてきたな
という顔で私にHiとだけあいさつした
Billy Bang
どうしようもない男(かれ)だった
でも沢山の事を教えてくれた
ニューヨーク　マンハッタン　観光客だった私

安いプエルトリカン　レストランに連れていってくれた
ライブの楽しさを教えてくれた
きびしさも　おしえてくれた

彼と会う事がなくなっても　私の事を思い出して
くれただろうか
彼が死んだ
私は彼が大好きだった

◆ 夏の時間

禿　慶子

フナムシが這いまわる岩穴をくぐると
無人の夏が座っていた
磯遊びの子どもも釣り人もいない
岸辺の崖がかすかな風を響かせ
浜菊の厚ぼったい葉が小さく揺れている
熱い砂地で足を焦がしながら
着ているものも屈託も千切って捨てる

岩の先端を蹴って水に沈んでいくとき
なぜか心が騒がしい
〈なにも考えない　なにも考えない
　海にからだを任せたいのだから〉
薄明るい深みで
少しずつ詰めていた息を吐くと
気泡が頬を転げていく
水の流れが耳許でささやく
海の泡がはじける音が聞こえる
からだが次第に柔らかくなり

無数の毛穴から海水が浸み込んでくる
そして　潮流にもて遊ばれる
しなやかな海草になっていく

岩場に戻るとき欠けた貝殻で足を切った
横たわって
傷口から流れる血が黒く固まっていくまで
午後の日射しに焼かれる
水平線がくっきり見えてきて
空と海の色分けができているのに
まわりはただ青く　ただ広い
わだかまりが乾いてポロポロ崩れていくようだ
（ここで蒸発してしまいたい
　からだも心も　今在る時間までも）
なにもかも些細なことになって
どうでもよくなってしまって

岩の裂け目からしぶきが放射状に突きあげて
空間を割っている
潮溜まりに引き潮が忘れていった
ミルの緑色の手袋が
しきりに波を招いている
傾いてきた岩場を渡り
水没しそうなフナムシの門をくぐる
暮れなずむ砂浜のむこうに
うっすらと黒い雲がひろがっていた

◆ うみうし

禿　慶子

錯誤の海のセピアの岩礁に
恋をしたいと願ううみうしがいた
祖先から引き継いだ雌雄同体の掟に
従うことができないのだ
からだのなかの男も女も殺してしまい
別の女になりたかった
終日　濃いインクを流して
心の痛みに耐えるしかなかった
あたりを夕暮れの色に染めあげて

異和のからだにみずが満ち
みずが引いていく錯誤の潮溜まり
嵐が岩を巻き　突風が波を千切って
かぎりない潮泡を降らせたあした
その　うみうしだけが女になった
長い間問い続けてきた憎しみの執念が
祖先からの掟を壊し男を殺してしまったのだ
だからその日から
いるはじのない男を求め続けなければならない
異性を求めてセピアの岩場を捨て
はてしない海底を彷徨った
うみうしの紫の液には憂愁が溶けている

神戸詞（うた）あしび

73-2013.08.17　大橋愛由等

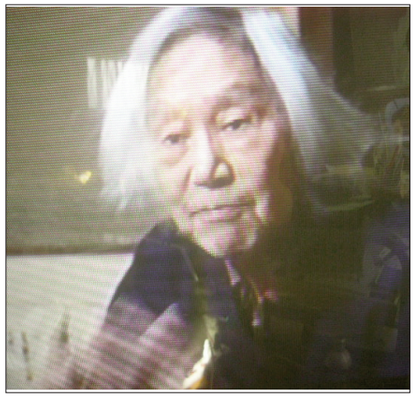
詩祭の日に永遠の詩業をはじめた詩人の作品世界

ロルカ詩祭が行われた八月一七日、兵庫県たつの市に住むひとりの詩人が亡くなった。金田弘（1921-2013）。高谷和幸や大西隆志といった播磨の後輩詩人たちに影響をあたえた表現者である。高谷・大西に対して追悼緊急インタビューをしつつ、金田が八六歳の時に上梓した最後の詩集『虎擲龍拏』を読むことで、その作品世界に触れてみた。

詩集『虎擲龍拏』を四つのテーマでとらえてみた。

一、花の詩人
二、ハリマを詠う
三、根源を問う
四、死と生を奏でる

このうち〈一、花の詩人〉についてひとつの作品を引用することでその作品世界に分け入っていこう。



金田弘氏

ジュンサイとともに

真昼の石州の寺で／セザンヌが雪舟の庭を歩きながら／ひそかにため息についている／庭石との問答にへいこうしたのか／山門のそばの川原で／アザミの花に黄蝶が二匹／座禅を組んでとまっている／「この道は人影の途中まで続いています」／「人間の死は謎ですね」／その向こうに小さな池があって／池の中に浮いた島がある／島にはカキツバタが移動しながら／咲いて埋まっていく／ジュンサイとともに池に移動し／ついにあの白い岩石に突き当る／また向こうの草原に一本松が見えたので／走って行ったが／山かげの中に雪女が全裸で立って／眠っていた／目を開けると溶けてしまうのだ／風立ちぬ／　この一日の「失楽園」を／明日の太陽へ／もう

詩集『虎擲龍拏』の中でも、花の名前が多く出てくる作品のひとつである。「真昼の石州の寺」で後期印象派の画家セザンヌが雪舟の庭を歩くという表現は現実にはありえないが、絵画的にはすっきりおさまってしまう美的整合性がある。ため息をついたのが「庭石との問答にへいこうしたのか」という表現も面白い。金田は禅寺の枯山水の庭をよく眺めていたというから、自分の経験から出てきた詩句であろう。この枯山水の庭園というのは、いわば無の開示である。平安時代の貴族たちが作庭した庭は自然を取り込んで凝縮させ、四季を展開させる「生き物」であった。水や樹木を配し、四季折々の花を咲かせるなど、自分が生きている時間と共時していく醍醐味を味わうのが、平安式庭園であった。枯山水はこうした自然や四季の移ろいを庭園という場そのものから排除し、無時間・無空間を現出させたものである。いつも変わらない石の位置、庭の様子、時と四季を感じるのは、その庭を見る者の心であり、その庭にたいする季節のうつろいを感受することなのである。

その庭に黄蝶が二匹座禅を組んでいるという妙なる光景。蝶たちの会話と思われる「この道は人影の途中まで続いています」「人間の死は謎ですね」も高踏的で興味深い。庭の池の中には島がしつらえてあり、順番に咲くと言われているカキツバタの開花の描写がある。もうひとつ登場するのはジュンサイ。水性植物で食用にされる。こうした衣金田が使う花は、花として一個の実存として歌われ、西脇のような抒情の契機として用いることなく、また永田耕てのように抒情と存在を超えた仏性のひとつとして捉えることもない。花は花なのである。詩の背景として屹立する存在であるといえよう。

詩と評論

月刊『Mélange』VOL.84

めらんじゅ

2013年08月17日　通巻84号
発行所／月刊「Mélange」編集部
〒650-0012 神戸市中央区北長狭通 1-7-1 2F
編集人／大橋愛由等〈『Melange』同人〉
Mobile 090-5069-1840
maroad66454@gmail.com
定価 500円（税込）

「いずれ」と言い直し
恩寵島に向けて出航してゆくのか

今日は八月一七日

まだ間に合う　ふるさとではなく
叛徒たちが闊歩する南にではなく
ヒターノたちと金床とハンマーの
カンテホンド生ふるあの街
シギリージャが悲しく響くあのテーブル
たわわなナランハがおしゃべりをし
トカゲたちも恋歌を愉しみ
逸楽の蝶がかなわぬ愛をそそのかし
小馬たちのサパデアードも小気味良いあの街にではなく
25時に出航する汽船に乗り
世界樹が植わり
訳知りの貌鳥もやさしく
詩人たちが持っている
あの恩寵島へ

ロルカよ
まだ間に合う　25時汽船に
ロルカよ

ほほほの次に
塩味饅頭を食べ
マナサニージャを
カルメンそっくりに

ほほほの次に
塩味饅頭を食べ
マンサニージャを
カルメンそっくりに　飲んでみせ
コロニアル様式のバルコーンから
剥いたらっきょの皮を
さんざんに放り投げると
やってきて ついばむ貌鳥は
「ハハ、ハハ」と啼く
きっと恩寵島に
八月一二日に死んだ
母が棲んでいることを
貌鳥は知っているのだ

25時が近づいている

航海日誌は更新されているのか
「×」とだけ記すのは
ぎっちょの航海士か
海象と時刻改正は
いつも青亀に教えらてもらい
風力　風浪
いつも「calm」とだけ
運賃を払った密航者に
祖国自慢にあけくれ
チャコリを二分半で飲み干し
次の寄港地を問われるのを嫌い
「やがて」と言い